

県の財政課長として

片 木 淳
鹿児島県財政課長
昭和46年入省

ミス鹿児島3名を含むおはら祭振興会派米団一行140名の副団長として、サンフランシスコ桜祭での大成功を手土産に、ハワイ・京城経由で帰国した日に財政課長を拝命した。

「1週間目には10年も居るような顔をし、1ヶ月経てば完全に仕事をマスターし、3ヶ月頃からは人の領分にまで嘴を突込む」というのが先輩から綿々と引き継がれた新ポストについての場合の心得であるが、新任後2ヶ月半浅学菲才の故を以て、未だ島津七十七万石の台所の全貌が掴みきれない。

鶴丸城跡に建設準備中の明治百年記念館建設調査室長の、いざとなれば天保の藩財政再建の立役者調所広郷に倣い、政府資金、縁故資金の別を問わず、藩債500万両の250年賦返済を断行すればよいとの大変心強いはげましのお言葉を心の支えに、目下猛勉強の最中である。

2年前、観光物産課長就任早々、県観光連盟の累積赤字解消を7ヶ月で達成せよとの条件付きで同専務理事に併任され、直属の上司会長小里県議会議長の指揮監督の下、関係各位のご協力を得て何とかこれに成功したことがある。

行政全搬について多かれ少なかれ言われることではあろうが、およそ観光行政の積極的展開と健全財政の理念ほど矛盾するものはない。ゼニの心配をされていては、どのように発達するかわからない夏の積乱雲ともいうべき不可解な国民大衆を動員し、本県観光界に慈雨をもたらすチャンスを開き入れずとらえることができない。小生も、毎日毎日連盟の預金通帳をにらみながらも、「貧乏な時ほどハデに」との大阪経営哲学を以て、積極的な事業の遂行に努めたつもりであるが、年度末にフタを開けてみると、案ずるより生むが易しのたとえどおり、予定外の黒字が出て、ご協力をいただいた関係各方面から「だまされた」とのおしかりを受け、「金は天下の回り物」との格言の真理の妙に触れた思いがしたものであった。

観光物産課長としては、錦江湾に桜島フェリーを浮べ、ミス鹿児島扮する木花咲耶姫まで登場させた納涼船ヨカ晚ナァ祭、誘致費用1千万、歓迎行事1千万、港湾整備8千万、計1億円をかけたクィーン・エリザベス2世号の受入歓迎行事、2回にわたる香港観光展、各エイジエントをまきこみ宮崎県との共同宣伝にまで発展したテレビ・スポットの放映、ルート毎に花木の種類を定めて植栽するフラワーライン整備事業の実施、大竹しのぶちゃんとの会食等数限りない楽しい思い出があるが、何よりもありがたかったことは、観光産業が第二次産業のウェイトの低い鹿児島にあって重要な地元企業であるだけに、多数の財界の名士と知り合う機会を得るとともに、地方経済政策の一端に触れる貴重な経験を得ることができたことであった。

財政課長は、このような意味では真に内部管理的職務であり、直接住民の方々と接触する機会に乏しいわけであるが、今度は、執行部の窓口として対議会折衝という重要な任務をとおして、多種多様な職業、経歴を有する県会議員の先生方と付き合う機会に恵まれたわけであり、学生諸君の一夜演あるいは小役人の机上の空論とは異なる生活の実感、実体験に根ざした真の勉強ができるのではないかと期待に胸のふくらむ思いの昨今である。

観光物産課長は、「乗せられやすい」タイプでなければ動まらない。池田湖にイッシーが、徳之島に大アラが出現しては興奮し、心からその存在を信じ、熊襲踊り、熊襲太鼓、熊襲鍋、熊襲マンジュウ、果ては熊襲キャバレーまで飛び出す熊襲部落構想に膝を打って喜ぶようではなければならない。財政課長が乗せられやすいようでは、鹿児島県財政の将来が危ぶまれるわけであるが、かといって、削ってばかりいさえすればそれでよいというのも大きな誤りである。

本県は、今後、東南アジアに対する南の玄関口という地理的条件と北方を峻険な山岳に画される一方黒潮により南方文化との交流を持ったことから、島津七百年の治政と相俟って有するに至った、「地方の時代」、「文化の時代」にふさわしい独特の地域社会の存在を生かして、過疎と低所得からの脱皮を図り、「ぬくもりにみちた偉大な鹿児島づくり」を強力に押し進めようとしている。

財政課長としては、このために限られた財源をいかに有効に使用するかについて充分に意を用いる必要があるのであって、真の意味で「乗せられ」ることも大いに必要となるはずである。

以上、要するに、財政課長も、観光物産課長とさほど違わないようであるので、自信をもって、これからも、自治官僚が一生の過半を捧げる地方自治行政に、地域・地域の振興に身を挺して取り組んで行きたいと考えている。